

元フリーター監督 念願の新作映画

二十代のころ、定職に就けず、やりたいことを見つけられなかった経験を生かし、映画の自費制作を始めた東京都中野区の田中情さん(三三)の作品「シンクロニシティ」が、五月に渋谷区で公開されることになった。昨春、作品の完成後、約一年間、駆けずり回ってようやく上映を見つけた。若者の閉塞感(ひんざう)を描いた作品で、「ルールから外れても生きていけるんだ」という若者へのメッセージが込められた。

(岡村淳司)



5月に新作を公開する映画監督の田中情さん(東京都中野区)

5月、渋谷区で上映

福岡県出身の田中さんは工業高校を卒業後、千葉県の洗剤工場に就職したが、友人ができず暮らしは単調だった。「何かやりたい」と二年で仕事を辞め、ボクサーのプロライセンスを取得したが、プロにはならなかった。ウエーターや引越した。役者やスタッフは無報酬の協力で、制作

の営業などを転々。レンタルビデオ店で働くうちに映像に興味を抱いた。ウエーター養成学校などで映像制作を学び、複数の映像コンペに入賞。ライブ用映像や、テレビ番組の仕事を得たが、二〇〇七年春に過労でダウン。療養のため一年間、アパートに閉じこもり、仕事も貯金も失った。

体調が戻り、映像制作会社に就職したが、上司とけんかして半年

で退職。酒におぼれた。火をつけたのは友人の俳優青柳尊哉さん(三三)だった。「映像を作れるんだろ。おれを主演で撮ってくれ」

〇九年、自分への怒りをぶつけるように、青柳さん主演の映画「キリトル」を作った。役者やスタッフは

費十万円。自主配給、自主宣伝。好評で、すぐ二作目に着手。二作目のシンクロニシティは長編にし、画家を目指す青年と若い女性の試練を描いた。

ただ、甘くはない。渋谷区宇田川町のシアター「アップリンク」が上映を承諾してくれるまで、約一年間、駆けずり回った。制作費は百五十万円で、三分の二は借金だ。「映画の登場人物は将来への不安を抱える自分と重なる」という。

田中さんは現在、ヘルパーをしている。映画で生計を立てるには程遠いが、最近、キリトルが日本作品を上映するドイツの「ハンブルク日本映画祭」に招待された。「ようやくライフワークを見つけた。あせらず一作一作を丁寧にじっくりたい」

「ルール外れても生きていける」